



スプリーム光臨

『俺、死んだのかな……………』

意識が遠くなってからしばらくして、ストレンジャーは不思議な空間を落下していた。周りは白く、他には色という色が無い空間。普通死んだら上へ行くと思う発想があるのだが、彼は下へと落下していた。

体制を立て直そうと、翼を動かそうにも動かず、手足を動かそうにも動かなかった。体は言う事を聞かず、ただ重力にしたがって何処かへと落下する。落下する方向を見るものの、下には何も無く、どれくらい落下するかも分からない状態だった。自分は今、何処で何をしているのか、全然検討の付かない状態だった。でも、覚えている事は一つあった。

自分は心を体から切り離し、手放した。それからだ、意識が遠くなり、このような空間で落下しているのは。

『下へ行って事は、待つ場所は天国では無いんだろうな…………… 皆に涙を流させちゃったし、当然といえば当然か……………』

ストレンジャーは自分がコレまで行ってきた行動を振り返り、自分が今までしてきた事を思い出していた。

島を奪還する。マスターを生死から救う。皆を敵から守り、助ける。全てが良い行いだったが、プラスもあればマイナスも思いあたってた。敵を倒し、皆を危険な目に合わせ、見捨てて、涙を流させた。

そんなマイナスがあったからか、ストレンジャーは後悔はしていなかった。自分が行った過ちを素直に認め、裁きを受ける覚悟だったからだ。そして今、自分が辿り着いた先で、何かが待っているのだろうと、悟った。

『ゴメンな…………… 皆……………』

ストレンジャーは一人、心の中で皆に聞こえないが謝った。そして、再び意識が遠くなり、目を閉じた。

ストレンジャーが再び気が付くと、何処かの芝生の上に倒れていた。横顔に芝生の草が触れ、背後から爽やかな風が吹いてきた。ゆっくりとストレンジャーは体を起こし、辺りを見渡した。

そこは、何処かの庭のようだった。自分が倒れていた場所は、綺麗に生え整えられた芝生の庭の一角の様だった。所々に小さな花々が生えており、人工なのか自然なのか、どちらとでも言えそうな場所だった。倒れていた場所の近くには、大理石で整えられた道があり、道のそばに等間隔で白い柱が立てられていた。柱もただの柱とは違い、異国の雰囲気に加え、何処からか高級感が漂っていた。

ストレンジャーが道の先に目をやると、そこには生垣で囲まれた大きな城がそびえ立っていた。四階、いや5階立てと思われる、とても大きな城だった。屋根は尖った円錐型、城壁は純白で輝

いているようだった。ビーイングキャッスルとはまた違い、別の高級感が漂っていた。

『……とりあえず、天国でも地獄でも無い、か。まだ、生きてるのか？』

一通りの景色を見た後、ストレンジャーはそう思い、胸に手を当てた。すると、いつもより少し弱いが、いつもの鼓動が手に感じられた。

『まだ、生きてるんだな。……とりあえず、出口を探すか。』

自分が生きている事を確認すると、手足が動く事を確認し、ストレンジャーは城へと足を運んで行った。芝生の上を歩くのは気が引けたのか、ストレンジャーは大理石で整えられた道まで足を運び、道に沿って城を目指して行った。

城周辺にある生垣は思った以上にでかく、ストレンジャーの背丈の三倍はあるかと思われる高さだった。生垣を抜け、城を改めてみると、こちらもとてつもない大きさだった。生垣なんて目じゃない。一体何メートルあるのだろうか、検討が付かない高さだった。四階五階部分が、表門前からは見えなかった。

『相当でかい城だな。城の持ち主は、相当な権力を持っている存在なのかもしれないな。』
ストレンジャーは新たに得た情報で、城に住んでいると思われる持ち主の姿を想像していた。その時だ。

「……貴様、何者だ。」

不意に、ストレンジャーの後方から声がした。振り返るとそこには、等間隔にトゲの付いた棍棒を持った、長身の双尾の狼男が立っていた。スタイルはズボンのみを着用したスタイルで、体や髪は白に近い灰色だった。目は紅く、口調からして警戒している様だった。

「俺は、いつのまにかこの城の庭に倒れてた龍、ストレンジャーだ。ココが何処か、教えてもらえないか？」

警戒している相手に聞いてもいいものなのかはさておき、ストレンジャーは素直に名前を名乗った。

「ストレンジャー、龍か。ココは俺達の主が住む国だ。何しに現れた。」

名前を名乗られ、狼男は情報を得つつ、目的を問いかけた。

「明確な目的は無い。ただココが別の場所なら、俺が元居るべき場所へと帰りたい。皆の元へと帰りたいんだ。」

「なるほど。」

対した目的ではないが、ストレンジャーは質問に的確に答えると、双尾の狼男はそう言った。

「居るべき場所へと帰りたい、か。ならば、俺がココから出してやろうか？」

「本当か？ ……？ でも、出すって？」

狼男が言った事に対してストレンジャーは軽く喜んだが、気になる語について問いかけた。

「ココには必要無い存在、帰る場所があるべき存在が居る場所ではない。お前を無に帰し、その場所へと送り届けてやろう！」

狼男が言ったのも束の間、持っていた棍棒を振り下ろし、ストレンジャーを攻撃した。慌ててストレンジャーはその場から逃げ、攻撃を避けた。棍棒は大理石の床にぶつかり、トゲが刺さった

と思われる部分は凹んでいた。

「なっ！ 話が噛み合っていないだろ！！」

攻撃を避けた後、ストレンジャーは数歩間合いを空けてから狼男へ言った。

「俺には帰る場所があるんだ！ 死んだら意味が無いんだよ！」

「死んだらいけるだろ？ あの世にな。」

「だから違うって！！」

ストレンジャーが言う事に耳を貸さず、狼男は次々に攻撃を繰り返した。慌てたストレンジャーは攻撃を交わし、ひとまず動きを止めるために剣を出そうとした。だが、

「！ 剣が出ない！ ！！」

ストレンジャーの手には剣が召喚されず、再びストレンジャーは狼男からの攻撃を回避した。

「軽い身のこなし、見事だな。さて、何処まで行けるかな？」

「チッ！」

狼男にもう話が通じない事を察し、ストレンジャーはその場から駆け出した。

「逃がすか。侵入者だ！ 敵を排除しろ！！」

狼男は大声で辺りの庭に向かって叫んだ。すると、何処からかそれに答える声がし、足音が接近してくるのをストレンジャーは感じた。

『マズイ！ コレじゃあ太刀打ち出来ねえ！』

ストレンジャーはそのまま城と生垣の間の大理石の道を走り、接近してくる狼男達から全速力で逃げた。だが唯一の武器である剣が召喚されないため、太刀打ちが出来ない状態だった。狼男達は全てストレンジャーよりも体格がでかく、素手での勝ち目も無かった。

『どうすれば……ッ！ しまった！』

ストレンジャーが作戦を考えていると、道を誤り、行き止まりに追い込まれてしまった。辺りは囲まれた場所となっており、目の前の扉は硬く閉ざされていた。

「追い詰めぜ、小さなドラゴンさんよ。」

すると後方から声がし、先ほどの双尾の狼男がそう言いつつ一歩ずつ接近してきた。その後ろからは別の狼男達が歩いており、同じくストレンジャーとの間合いを詰めていた。武器も無く、人数や体格的にも勝ち目は無く、ストレンジャーは勝率がゼロだという事を悟った。そして、周囲を狼男達に囲まれてしまった。

『っ！ ココまでかッ！』

狼男達は持っていた棍棒を持ち直し、振りかぶった。ストレンジャーは負けを認め、目を瞑った。

その時だった。

♪～～♪～

何処からか、この世の音とは思えない綺麗なベルの音が鳴り響いた。音を耳にした狼男達は動きを止め、音のする方角を見た。

ギーー……

「待てお前等。その龍は敵じゃ無い。」

それとほぼ同時に、ストレンジャーの後方から、前に立つ狼男達の行動を止める別の声と、扉を開ける音がした。ゆっくりとストレンジャーが目を開けると、目の前に立っていた狼男達が棍棒を納め、声のした方向を見て立っていた。

後方に振り向くと、そこには別の狼男が立っていた。だが前に立つ狼男達と違い、こちらは上半身に鎧を身に纏い、蒼いズボンと皮ベルトと言う整った服装だった。

「彼は俺の知り合いだ。この騒動の後始末は俺がする、お前らは仕事に戻れ。」

「ハッ！」

隊長なのか、その狼男が命令すると、集まっていた狼男達はその場を後にし、見張り仕事へと戻って行った。

「すまなかったな、ストレンジャー 怪我は無いか？」

残った狼男はストレンジャーのそばへと行き、片膝を地面につけ、怪我が無い事を確認した。

「……どうして、俺の名前を。」

「それは歩きながら話そう。今から来て欲しい場所があるんだ、来てくれないか？」

狼男はそう言うと立ち上がり、ストレンジャーに同行を求めた。

「あ、ああ……」

「俺はスプリーム。この世界を統括する主に作られ、城の護衛隊の指揮官を務めるオリジナルキャラクターだ。」

スプリームと名乗る狼男は、ストレンジャーの言った答えを聞き、城の中へと入って行った。ストレンジャーは慌ててスプリームの後を追いつつ、城の中へと入って行った。

真の存在価値

「ここはストレンジャーの主でもあり、俺らの主でもある『ラブソディ・ウルフ』の住む城だ。」

スプリームと共に城の中へと入ったストレンジャーは、話を聞きつつ城の中を歩いていた。

「マスターの、城？」

「ああ。簡単に言うと、ココは主の心を写した世界だ。」

「心の世界……」

スプリームにそう言われ、ストレンジャーは城内を見渡した。壁と天井、床は綺麗な白で統一され、廊下には赤い絨毯が敷かれていた。城独特の壺等の飾り物は無いものの、それでも高級感が漂っていた。時々城内の清掃を行っているメイドを見かけ、スプリームを見ると会釈をしていた。

次にストレンジャーは、窓の外を見た。外には先ほど見た生垣があり、綺麗な青空が広がっていた。城内の所々には先ほどの狼獣人達がおり、スプリームの姿を見ると、メイド同様に軽く会釈をしていた。

「……スプリームは、ココのリーダーか何かか？」

見かけた他の存在達が同じ行動をしているのを見て、ストレンジャーはスプリームに問いかけた。

「まあな。この城にいる存在達の指揮官であり、主直属の騎士(リレイター)だ。ストレンジャーの名前を知っているのは、主の記憶の大半を知っているからだ。」

「そうだったのか……」

先ほどから気になっていた問いかけに対する答えを聞き、ストレンジャーは納得した。

「……まずはここだな。」

スプリームはそう言うと、一つの部屋の前で止まり、扉を開けた。中は暗く、なにやら棚が沢山並んでいるそこは、武器庫と思われる部屋だった。

「武器倉庫、か？」

「ああ。主が今まで見てきた武器達の中で、気に入ったデザインの物がすべて置かれている。偶に色や形に変形部分があるのは、記憶があいまいになっていると言う事だ。」

スプリームはそう言うと、部屋の照明をつけ、奥へと向かって行った。ストレンジャーも同様に後に続きつつ、棚に置かれた武器を見た。確かに棚に置かれている武器うち、少数は形が変形したもの、欠けている物、色が抜けている物があった。もちろんきちんと形が残っており、記憶がしっかりしていると思われる物もあった。

一通り見た頃、部屋の奥にあった扉が開く音がした。

「ストレンジャー こっちだ。」

スプリームはそう言うと、ストレンジャーをその部屋の中へと案内した。ストレンジャーが部屋の中へと入ると、そこには先ほどとは違い明るい部屋が広がっており、台座が点々と置かれていた。その台座の上には、見た事のある武器が浮いていた。

「ここは。」

「主が自ら作り出した武器達の保管庫だ。一番思い入れがあるから、形も色もはっきりしている。」

スプリームはそう言うと、部屋の中心にある少し大きめの台座の元へと向かった。そこには、ストレンジャーが今まで使っていた剣が浮いていた。

「俺の剣。」

「ここでは違う世界の武器は使えない。武器は自らが存在する世界でしか使えないし、召還も出来ない。それに、この部屋は特殊でな。」

スプリームはそう言いつつ剣に手をかけ、取ろうとした。だが剣は浮いたままその場を離れず、スプリームの元には行こうとしなかった。

「ストレンジャー、取ってみな。」

「あ、ああ……」

剣が取れない事を証明した後、スプリームはストレンジャーに取るよう勧めた。ストレンジャーも同様に剣に手をかけ、引いた。

すると、剣はすんなりストレンジャーの手の中に収まった。

「スプリームが取れなかった武器が……」

「この部屋の武器は、主が作った武器達の保管庫。だからこそ、ふさわしい持ち主にしか武器は取れないし、使う事は出来ない。」

「俺だけが、この剣を使えるのか……」

スプリームからの説明を受け、ストレンジャーは手にした剣を見た。今まで使ってきたあの剣と同じで素材は水晶。心なしか、少し光り輝いている様だった。

「でも、記憶の中の武器を手にしたら、記憶が無くなるんじゃ……」

ふと疑問に思い、ストレンジャーはスプリームに問いかけた。

「大丈夫だ。さっきも言ったが、主が自ら作り出した武器だ。記憶が消える事は無いし、再びこの台座に姿を現す。」

スプリームはそう言うと、再び何も無くなった台座を見た。すると、台座の中から先ほどの剣の剣先が現れ、徐々に台座の中から復活しだした。

「それに、ストレンジャーの武器は特殊だ。無くなる事は無い。」

「そうだったのか。」

再び台座の上に姿を現した剣を見て、ストレンジャーは安心するように言った。その後、二人は部屋を後にした。

「さてと。次にその剣の効力だな。」

「効力？」

自分の手にしっくり来る剣の感触を一通り確認した後、ストレンジャーはスプリームの言った事に問いかけた。

「ストレンジャーは、その剣の真の効力を知ってるか？」

「切れ味とか、そこらへんの事か？」

「まあ大体そういう所だ。」

スプリームはそう言うと、別の部屋の扉を開け、中へと入った。そこはトレーニングジムと思われる場所であり、所々に金トレ用の器具が置かれていた。

「ダイヤモンド以上の強度で無ければ、何でも切れる。そして属性効果を吸収して、刃に向ける事ぐらいだ。」

「そうだな。」

パチンッ

ドスッ

ストレンジャーの言った事に対してスプリームはそう言うと、部屋の中央で指を鳴らした。すると、部屋の天井の一部が無くなり、ストレンジャーと同じ位の背丈の木箱が一つ落ちてきた。

「まずは木箱だな。切ってみてくれ。」

「あ、ああ。」

スプリームにそう言われ、ストレンジャーは剣を構えた。

「破ッ！」

ガシャンッ！

剣を振ると、木箱は綺麗に一刀両断され、床に倒れた。

「体制と振り方に無駄が無いな。」

ストレンジャーの行動動作を見て、スプリームは称賛した。

「あ、ありがとう。」

「よし、じゃあ次だな。」

床に転がった木箱を一時退かし、スプリームはもう一度指を鳴らした。

パチンッ

ドスン！

すると、先ほど同様に天井が開き、今度は大き目のダイヤモンドが降って来た。ダイヤモンドは綺麗な光を放っており、色は純白色だった。

「ストレンジャーの話だと、ダイヤモンドは切れない。切ってみな。」

「……本当に、切れるのか？」

スプリームの言った事に対して少々疑惑に思いつつ、ストレンジャーは問いかけた。

「その剣の真の力は、本人の意思で何でも切れる事だ。今までそう思っていたから、切れなかっただけだ。」

「そうなのか？」

「モノは試した。心の中でそう思って、剣を振ってみな。」

スプリームにそう言われ、ストレンジャーは少々疑心に思いつつも心でそう願い、剣を振った。

「破ッ！」

スッ！

ダイヤモンドはすんなり剣の動作を受け入れ、その場に一刀両断された。

「切れた…… 今まで切れないと思ってた、最高強度のダイヤモンドが……」

「さすがだな。」

ストレンジャーが驚く中、スプリームはそう言い、切れた木箱とダイヤモンドを回収した。

「本来その剣には、切れないものは存在しないんだ。その剣が存在する意味、知ってるか？」

切れた物品を片付けた後、スプリームはストレンジャーに問いかけた。もちろんストレンジャー本人が知っているわけも無く、首を横に振った。

「その剣の存在する意味は『どんな困難も、全て切り裂く』 たとえ超えられない困難や苦痛があっても、邪魔するものは全てストレンジャーの意思で切り裂くことができる。」

「この剣に、そんな意味があったのか……」

スプリームにそう言われ、ストレンジャーは持っている剣を改めて見た。剣は先ほど同様に少し輝いており、空色の剣刃が綺麗な色を示していた。

「さて、次だな。ストレンジャー、俺の事を切ってみな。」

「えっ!？」

スプリームの言った事に対して耳を疑い、ストレンジャーは叫んだ。

「ス、スプリームを切るのか!？」

「ああ。……慌ててどうしたんだ。」

ストレンジャーの動揺を見て、スプリームは首をかしげた。

「この剣は何でも切れるんだろ!？ そんな事したら、スプリームが死んじゃうだろ!!」

「……やっぱりな。主の言うとおりに、ストレンジャーは優しいんだな。」

ストレンジャーからの返答を聞き、スプリームは苦笑しつつそう言った。

「たとえ見知らぬ存在でも、敵で無いと認識したら刃は立てない。心優しい龍か。」

「わ、解ってるなら何で……」

スプリームの言った事に対して、ストレンジャーは少々呆れつつ言った。

「解ってるから言ってるんだ。ま、体とは言わないから、試しに手を剣で切ってみな。」

一通り言う事を言った後、スプリームはストレンジャーの近くに手を出した。

「……」

スプリームにそう言われたストレンジャーは、仕方なく剣を構えた。さすがに一度自分の命を助けてもらい、いろいろ教えてくれた存在を切るのは、心が痛むようだ。

「……ッ！」

ストレンジャーは目を瞑り、スプリームの掌に剣先を当てた。しかし。

「………… き、切れてない……」

剣が一定の場所で止まった事を確認し、ストレンジャーはゆっくりと目を開けた。スプリームの掌には、先ほどまで完璧な切れ味を見せていた剣が直に触れているにもかかわらず、全然切れていなかった。

「ストレンジャーが敵と認識しない限り、その剣の切れ味は最低ランクまで落ちて、切る事は無い。たとえ俺の左胸に剣先を突きつけても、刺さる事は無いし痛くも無い。」

「……よかった。」

スプリームを切らなかった事に対して、ストレンジャーは安堵のため息をついた。そして、その場に座り込んでしまった。

「ゴメンな。心が痛むような事させちまって。」

ストレンジャーの目線に近い位置まで腰を降ろし、スプリームは謝った。

「いや、大丈夫…… 切れたらどうしようかと思ったが、やっぱり他者は切れないな…………」

「それがストレンジャーさ。だからこそ、主はこの剣を託したんだ。間違った使い方をしないからな。」

「そうなのか……」

スプリームにそう言われ、ストレンジャーは再び剣を見た。剣は先ほどの様な綺麗な輝きを放っておらず、効力を失っているような色をしていた。力を制限された、そう見るのが無難だろう。

「さてと。俺がストレンジャーに教える事は、あと一つだな。」

ストレンジャーの手を取り、スプリームは立ち上がりつつ言った。

「あと、一つ？」

「……ストレンジャーが生まれた、本当の理由さ。」

スプリームはそう言うと、その場を歩き出した。慌ててストレンジャーは剣を消し、後を追った。

「人の心は脆く、何かの支えが無いと生きていけない弱い存在だ。俺達とは違い、悲しくて弱く、脆い存在。」

再び城内の廊下へ出た後、スプリームは話をしつつとある場所へと向かい出した。

「主が真に信頼出来る存在がない事は、ストレンジャーは知ってるか？」

「あ、ああ…… 人間が信頼出来ないと言う位、他者にはあまり恵まれていないらしい。」

質問に対して、ストレンジャーは少々顔色を暗くした。

「裏切られて、傷付けられて、いい人と言える人が少ない。悲しいことだ。」

スプリームも少々寂しそうに言った。

「そして、それをきっかけに創られた存在が一人。その存在の名前が『ストレンジャー・ザ・ドラゴン』だ。」

「俺……？」

スプリームは話をしつつ、足を止めなかった。

「他者を裏切ることが無い、相手に対しての優しさを忘れない。表向きでは凶暴と呼ばれ、邪神や災いの元凶呼ばわりされる事の多い、龍を元にして作った存在。」

「.....龍は元々、力や災い、マイナス面を表す事が多い存在だからな。」

「そうだな。」

ストレンジャーの答えを聞いて、スプリームは相槌を打った。

「ストレンジャーを作り出した後、対照的という意味で、主はもう一人の存在を創った。」

「俺と対照的に、もう一人？」

スプリームの言った事に対して、ストレンジャーは驚いた。

「.....それって、もしかして。」

「そう。それが俺だ。」

スプリームはそう言いつつ、廊下のつきあたりの扉を開けた。そこは柵で囲われた、バルコニーの様な場所だった。目の前には、滝が静かに流れていた。

「滝.....」

「造りが不明確って思うだろ。それがこの城さ。」

スプリームは苦笑しつつ、柵にもたれた。

「主曰く、ストレンジャーは主の心を支える存在で、俺は体を支える存在。そして、それぞれに対なる武器を託した。」

そのままの体制で、スプリームは話を続けた。

「対なる武器って..... 俺の剣と、スプリームのそのメイスか？」

「ああ。そうだ。」

スプリームはそう言うと、背中に装備していたメイスを手を取った。

「このメイスは、ストレンジャーの剣では太刀打ち出来ない『精神壁(メンタルウォール)』を壊す事が出来る。」

メイスを軽く振りつつ、スプリームは言った。

「精神壁？」

「何回かあっただろ。紫色のバリアが張られて、攻撃が無効化された時が。」

「あ、ああ..... アレの事か。」

軽い具体例を上げると、ストレンジャーは納得した。

「アレはすなわち、存在が無意識で持つ負の感情が具現化したものだ。他者の干渉を嫌い、その中で孤独感に浸らせる嫌な壁だ。」

「.....そういえば、そうだったな。干渉を拒んでいた。」

スプリームに言われ、ストレンジャーは思い出しつつ言った。以前までにその壁に出会った時は、どれも敵対し干渉を拒んでいたのだ。

「そんな壁を一撃で壊すのが、このメイスだ。武器の意味は『孤独な感情を打ち砕く』 切れない壁を真から砕き、解放させる。」

「そうなのか.....」

スプリームにそう言われ、ストレンジャーは彼の持つ武器を見た。先端には金色のベルに似た形の金属が付いており、回りにはカラフルな装飾が施されていた。そして、ストレンジャーの持つ剣同様、先端には水晶がついていた。

「……俺はやっぱり、元々フォローする存在だったんだな。必然的にマスターの元に行って、共にしていたのはそのためか。」

スプリームからの話を聞いて、ストレンジャーはそう呟いた。自分の存在する理由が、すでに定められた事を知った。出会い、今後の行動を共にして支えるのが、必然化していたと言う事。意識的にではなく、無意識のうちだったという事。

全てを知ったからこそ、ストレンジャーは悩んでいた。

「本当は言いたく無かったんだが、もうすでに事が始まった。言うという選択肢しか、俺には残っていないんだ。」

ストレンジャーの悩む顔を見て、スプリームは悲しそうに言った。彼も彼なりに考え、ストレンジャーに全てを話した。だがそれは、ストレンジャーを確実に悩ませる事だったのだ。

「……良いんだ。スプリームはココにいるという事は、俺が知る以前から知って行動してたんだろ。スプリームの方が辛いって事ぐらひは、解る。」

「ストレンジャー……」

「それに、俺がそれをする事が定めなら、スプリーム同様に行うまでだ。何を聞いても、今の考えを変える気は無い。」

スプリームに対してそう言いつつ、ストレンジャーは顔を上げた。

「行こう。マスターの元に。」

「……ああ。」

ストレンジャーからの勇気を貰ったのか、スプリームは再びいつもの表情になった。

「主は今危険な状態になってる。まずはそれから解放させるぜ。」

「了解！」

スプリームからそう言われ、ストレンジャーは承諾し二人はとある部屋へと向かって行った。

『子供なのに、行すべき行動に従う……俺以上に大人じゃねえか。』

自分の隣を走るストレンジャーを見つつ、スプリームは思った。先ほどとは違う瞳の輝きを持って、自分と共に歩いている龍の青年。たとえ知ったのが遅いとはいえ、辛いのは目に見えている。

『……主が創った後も好きになるのが、解る気がするな。』

スプリームはふとそう思いつつ、歩を進めて行った。

その後、しばらく城内の赤いカーペットの敷かれた廊下を、スプリームと共に並んで歩くストレンジャー 体系も暮らしも違い、住んでる世界も違う2人が並んで歩いている事は、ある意味不明の点が多々あるものの、今はそこまで気にしていない二人。それもそのはずだ。共に写し身に近い存在で、守るべき主(マスター)が共に同じなのだから。

二人は対なる存在として作られ、共にするべき行動を必然的に行っている存在同士。たとえそれが無意識の内の行動だったとしても、二人はその行動を否定はしなかった。それだけの大きな行動を任されているという事は、それだけで存在価値が高いということでもあるからだ。だが二人は、そんな計算高い考えで行っているのではなく、『純粋な気持ち』ただ一つで行動していた。だからこそ、その行動に苦を抱く事はなく、自然の気持ちで行動を行えるのだ。

造りが不明確な城内を歩く事数十分。

「着いたぜ。ストレンジャー」

階段の昇り降りを繰り返し、ストレンジャーとスプリームは一つの部屋の前へと到着した。着いた場所は、城の第四階層の部屋の一つ。城の管理者である主の部屋だ。

この世界に存在する城には、必ず一つその城の管理者である主の部屋がある。そこには城を形成した者がおり、城と周辺気候、土地を管理する。外部から侵入者が来るのは、その主が本来住む世界で、外部からの何らかの干渉によるものだ。

それが心にどう影響したかによって、敵は姿を変え、城へと向かう。向かう存在は主に敵であり、騎士達は城の崩壊を防ぐために戦うのだ。城によって騎士達の姿は変わり、持ち主が一番信頼出来る騎士が、その世界に住んでいるのだ。それが自ら作り出した存在なのかは、不明だ。

ストレンジャーはスプリームが誘導した部屋の扉をゆっくりと押し、中へと入った。部屋は薄い空色を主体とした部屋となっており、部屋の中央には天井の着いた大きめのお姫様ベットがあった。ベットの奥には大きな窓ガラスが張られたテラスとなっており、それ以外には特に何もなく、シンプルな部屋となっていた。

「ここが、マスターの部屋。」

「ああ。城にいる時はいつもココにいて、外部と俺等の事を見守ってくれている。」

スプリームはそう言うと、部屋の奥へと向かって行った。ストレンジャーもその後を追って、部屋へと入った。二人がベットの先へと向かっていくと、そこには一箇所だけ光る金色のタイルがあった。タイルの大きさは、大体ストレンジャーとスプリームが並んで立てるだけの広いものだった。

そんなタイルの外側に沿って白い光が帯状に出ており、どうやら踏み台に近いものようだ。光の出方を見ていると、乗ったら上に移動出来そうな雰囲気を出していた。

「このタイルの上に乗ると、俺すらも入る事は許されていない最上階層へと行ける。主はこの先に居るんだ。」

「マスターが……」

最終目的地である場所への移動手段と説明され、ストレンジャーはタイルを見つつその上を見上げた。だがそこには周囲の天井と同じ作りとなっており、ただ単に天井に向かって飛んだとしてもその上には行けないと推測できた。

スプリームさえも入らない第五階層には、何があるのか。ストレンジャーは少しだけ、身震いをしていた。

「……準備はいいか、ストレンジャー 乗ったら最後、生きて戻れるかも分からないぜ。」
さすがにこれ以上先は身の危険があるためか、彼は直接ストレンジャーにそう問いかけた。彼自身も無事で帰ってこれるかは分からないらしく、心の準備だけは整えて行きたいと思ったのだろう。そんな、確認でもあり重い言葉だった。

「ああ、良いぜ。マスターがこの先で待っているんだったら……俺は、助けたい。」

「わかった。」

だがココに来て彼の意思も変わる事は無く、ストレンジャーはそういい、スプリームの目を見た。先ほどから変わらず目には意思の色が映っており、たとえ何があっても彼は逃げないという意思の表れでもあった。

幼い雰囲気はすでになく、そこに居る彼はスプリームと同じ年かと思われるほど立派な姿だった。何がなんでも、ココの管理者でもあるラプソディを助けたい。そんな想いさえも、目から読み取れるほどだった。

「……行こう。主の元へ。」

「ああ。」

二人はそう言うと、静かにそのタイルの上へと乗った。すると、タイルから出ていた光の帯が徐々に変形しだし、彼等を頭の上から優しく包み込みだした。どうやらタイル自身が上部へと移動するわけではなく、光自体となって上へと移動する仕組みのようだ。何処と無くハイテクでもあり、ファンタジーでもある移動手段だった。

光に包まれ段々と身体の重みが減っていくと、何時しか二人は宙へと浮いていた。周囲は白くなっているため視界では確認出来ないが、身体の感覚ですでに移動しているのだと彼等は感じていた。この先に何があるのかは分からないが、彼等は身を任せ第五階層へと向かって行った。

シュンツ……

「っと。……うわぁ……」

しばらく運ばれる事、約数分。ストレンジャーは移動が止まったと思い足を出すと、そのまま足場へと降り立った。先ほどまでの煌びやかで明るい雰囲気だった空間は一変しており、目の前には蒼く星空に近い空間があった。床の至る所から白いほのかな光が出ており、壁はそんな床よりは明るいものの、それでも空に近い雰囲気だった。部屋の点々とした所から淡い光が出続けており、照明器具は無いものの明るく照らされていた。

軽く回りに圧倒されつつも、ストレンジャーは隣にスプリームが居る事を確認し、前へと歩き出した。彼等の行く前には大きな操作盤に近い機械があり、軽い機械音とネオンライトに近い光を出していた。そしてそんな機械の前には、一つの影が地面に座って機械を眺めていた。

「……………」

「……来たカ。我の元へと導かれシ、存在ヨ。」

影から一定の距離離れた場所に立ち止まると、影は座ったままの体性変えずにそう言った。よくよく見ると、影は自分の足でその場に座っており、ストレンジャーやスプリームとまた違った体格をしていた。ライトで軽く照らされているその影には、頭に突き出た耳があり、全身は大量の体毛で覆われていた。

地面に近い所には大きな尻尾があり、軽く左右に揺らしていた。

「オオカミ……？」

「薄暗い部屋デ……我を識別出来るとはナ。さすが、あの者が創りだした存在なだけはアル……」

呟き混じりにストレンジャーが言うと、影は感心しながらそう言いつつその場に立ち上がり、こちら側にゆっくりと歩いてきた。四足でこちらへとやってきたのは、白銀の体毛の姿をした大きな狼だった。

ストレンジャーよりも体格は大きく、下手したらスプリームさえも押し倒してしまいそうなほど大きな存在だった。目は紅色をしており、背後に揺れる大きな尻尾が、よりいっそう美しくもあり気高い存在のように見せていた。

「フェンリル……」

「え？」

「フッフッフ…… さすがあの者と行動と命を共にする存在ダ、すぐさま気付いたカ。」

やって来た影を見つつ、スプリームはそう言った。そこに居た存在、それは『フェンリル』と呼ばれる幻獣だった。

ラプソディの元となったその存在が、何故ココにいるのか。ストレンジャーは分からない事がある中、二人が対峙している存在なのだという事だけは、その場で悟った。

「お前がこの騒動の黒幕だという事は、分かっている。ストレンジャーを元の場へと戻し、主を解放してもらおうか。」

「気付いてない、はずが無いと言う事カ…………… いいだロウ。」

スプリームが睨みつつ対峙する中、彼はそう言い放った。軽く意味深にそう言うと、フェンリルは軽く前足を地面の上でに数回叩いた。すると、

バツ！！

「ッ！？」

瞬時に薄暗かった部屋の色合いが変化し、辺りが一気に明るくなった。一瞬何が起こったのか分からずストレンジャーが手を目の前にかざすと、フェンリルの居た場所から少し離れた場所に、

大きな水晶が出現していた。

紫色よりも淡いスミレ色をしたその水晶の中に、一人の存在の姿があった。

「マ…… マスター……！」

ストレンジャーはそれを見た瞬間、呟く様にそう言った。

そこにはこの城の管理者でありスプリーム達の主、ストレンジャーのマスターでもあるラプソディが閉じ込められていた。クリスタルの中で漂う様にラプソディは閉じ込められており、目を瞑り、両手を祈るようなポーズで胸の前で構えていた。

スタイルは今まで見た事の無い服装で、上は襟と袖がついた黄緑色のドレスで、背丈と同じくらいのサイズだった。足元からは赤いハイヒールが見えており、背後の襟元からは朱色のヴェールが出ており、マントの様になっていた。ゴージャス感漂うそのドレスは、とても高貴な姿だった。

。

「主……」

先ほどから変わらない体制のままだったスプリームは、その光景を目にしたまま涙を流し悔やむ様に呟いた。その表情には、主を守れなかった不甲斐ない自分自身に対する苛立ちと、自力で助けられなかった事に対する悲しみの色が出ていた。先ほどまでのスプリームとは違い、とても悲しそうだった。

彼のそんな光景を見ていると、心から主に仕え、心配している騎士の様子が伺えた。気高くもあり、勇ましくもある隊長の姿だった。

「……お前が、やったのか。フェンリル。」

本当の黒幕である事を確認すると、ストレンジャーはスプリームの変わりにそう問いかけた。軽く戦闘態勢になりつつあり、右手にはいつしかあの剣が握られていた。その様子を、涙を腕で拭いながらスプリームは軽く見ていた。

「我意外にする存在は居ナイ。我の目的は、貴様ダ……青龍。」

「俺……？」

問いかけに対する答えを聞き、軽くストレンジャーは驚いた。まさかこの事態の黒幕の目的が、自分自身だとは思っても見なかった事だ。さすがにコレには彼も驚いており、一瞬戦闘体勢が緩んだ。

「至高の存在になりうる可能性を秘めた貴様ト、対峙する為に行った策ダ。ヘルとヨンムンガルドも、進んで協力してくれタ。」

「チェリーと……テュード……！」

「名など、どうでもイイ。あの者が創りだした存在の中デ、一番彼等に近い存在を利用したまでダ…… おかげでいい器ヲ、手に入れる事に成功シタ。」

彼等の知らない所では、未だに戦争は止まらないで行われていた。今では外の環境も知る事は出来ない上に、ストレンジャーの体は身動きが取れない状態だ。

そんな自分の知り合いである存在達を使ってまで引き起こしたこの戦争を考えると、ストレンジャーには耐え難い苦痛だった。望んでも居ない存在、ましてや彼の兄弟さえもが利用されてまで再現された『ラグナロク』幾戦もの血と涙が流れ、未だに止まらないその戦い。

彼はその事を考えると、身体が少しずつ熱くなるような感覚を覚えた。

『フッ…… もう少しダナ……』

そんな彼の換わり行く様子を見て、フェンリルは心の中で軽く笑みを浮かべた。彼の目的、それは今居るストレンジャーの中で眠る存在と対峙する事。至高の存在の中に眠る高貴な存在こそ、今回彼がもっとも戦いたいと願う相手だ。

だが普通には出てくる存在ではなく、今のストレンジャーの意識を変えなければ出てこない。だからこそ、ワザと彼は悲惨で残酷な状態を作り出し、その存在を誘い出したのだ。このままの状況が続けば、求める存在が出てくる。フェンリルはそう思った。

しかし。

バツ！

「？」

「スプリーム……？」

考え事をしていて軽く俯いていたストレンジャーの前に、スプリームが立ちふさがった。急な事だったため、フェンリルもその行動は呆気にとられた。

「なるほど…… お前の真の目的は、そっちか。フェンリル。」

「フッフッフッ どうやら感づいた力…… さすが心の世界に住まいシ存在ダ……」

この状態が導き出された本当の目的を察し、スプリームは何時しか装備していたメイスを片手に対峙していた。だがこうなる事は想定されていた様子で、フェンリルはそう言いつつ戦闘体制に入っていた。

先ほどまで普通だった手足の爪が急成長しだし、彼の武器となり出した。どんな万物でも引き裂いてしまいそうなほど、切れ味がありそうな爪。目は紅色から真紅の目となりだし、この場でも戦いの火蓋が切られそうな勢いだった。

「スプリーム……」

「今は何も考えるな、ストレンジャー 奴の目的は、君のその優しさを忘れた心だ。龍の優しさを忘れては、駄目だ。」

戦いとなりそうな光景を眼にし、ストレンジャーが呟いた言葉にスプリームはそう付け加えた。本当の目的を軽く説明し、そうしないためにする事を軽く伝えていた。先ほどまでの優しそうな彼の表情はそこには無く、戦う事を定められた騎士のような姿をしていた。

もう、後戻りは出来ないのだろう。 そう思わせるような、顔つきだった。

バツ！！

そしてその場で、両者は地を蹴り出し戦いに身を投じた。

城の最上階層で始まった、激しい戦い。大広間と化したその空間では、二人の存在が戦っていた。

「ハァアアアー！！」

ガキンッ！

「フッ、甘イ！」

両者の攻撃がぶつかり合い、金属の擦れる音が鳴り響く。狼達が戦うその空間は、まさに戦場の一角となりつつあった。

守るべき存在、助けるべき存在のために戦う狼獣人の騎士『スプリーム』 対する相手は、発達させた爪を武器に相手を引き裂こうとする天狼『フェンリル』 両者は一歩も引かず、ただ対立する相手を倒すためだけに戦っていた。

『スプリーム……』

その空間の一角にある大理石の柱のそばには、その戦いの成り行きを静かに見守っているストレンジャーの姿があった。彼と同じ考えを持つスプリームに言われ、戦いの邪魔にならない場所へと移動した彼は大人しくその成り行きを見守っていた。

今のストレンジャーが戦いに参加する事は、敵の思う壺と言われたため、今は何もする事が出来ない様子だった。彼の援護をしたり、マスターであるラブソディを助けに行こうとも考えていた。だがそれすらも敵の策略かもしれないと思うと、彼は静かにしている方が一番いいのではと思っていた。

『……大丈夫、だよな。スプリームは、強いんだから。』

よくよく考えると、スプリームからしたらストレンジャーの援護はもしかしたら邪魔になってしまい、かえって足手まといになってしまうかもしれない。それほど彼は強いとストレンジャーは思っており、彼の戦いを見ている方が落ち着くと考えていた。

ズサァアッ……！

「フッ、中々の腕前だな。ウェアウルフ。」

一度スプリームとの間合いを開けたフェンリルは、そう言いつつスプリームを見た。互いの腕はほぼ互角と思われ、間合いを開け一息つくほどいい戦いと思われた。軽く間合いを開け、相手を見つつ歩きながらそう言った。

「甘く見てもらっては困るな。伊達にこの城を守る、部隊の隊長を任されたわけじゃない。」スプリームもその合間に一息つきつつ、相手が軽く動こうものの片時もその動きの変化を見逃さなかった。彼の瞳は先ほど以上に濃い藍色をしており、すでに戦闘体制になり相手の行動が止ま

るまで行動をやめそうにはなかった。

「……そのようだな。だが、何処まで我についてくれるカナ。」

「その言葉、そのままお返しするぜ。……貴様の思い通りには、させない！！」

バツ！

軽い休憩も束の間、すぐさまスプリームは行動に移るべく地面を蹴った。その行動を見て、フェンリルもその場から飛び出し相手に向かって行った。

「覚悟……！」

先に攻めだしたのは、行動に移る速さがあったスプリームだ。右手に持ったメイスをそのまま相手に向かって振り下ろし、攻撃に移った。

「どうかナ……！」

だが相手も一筋縄で行くような相手でもなく、その攻撃を発達した左前足の爪でなぎ払い、そのまま右前足を軸に身体を動かしながら両足で攻撃した。

ガッ！

「甘い！！」

まるでその行動を読んでいたかのように、スプリームはそう言いながら左手で足を捕まえ、大きな体格をもろともせず片手で相手を宙へと投げ上げた。そしてそのまま右手に持ったメイスを投げる体制へと入り、懇親の力を込めて相手に向かって投げた。

「お互い様……ダ！」

ガキンッ！

投げられ空中で体制を立て直したフェンリルは、そう言いながら飛んで来たメイスを蹴り落とした。そしてそのまま大きな口を開け、周囲の空気を吸い込んだ。

『……！ 咆哮！！』

「グルウァアアアア！！！」

ゴォォォォー！！

一度吸い込んだ空気を口の中で止め、フェンリルはその空気を攻撃物質へと変換し放った。咆哮に近い遠距離攻撃が来ると予想したスプリームは、冷静に攻撃の角度等を見て予測し、後方へと跳んだ。それと同時に、フェンリルは分厚く紅い帯状のレーザー光線を放ち攻撃を開始した。だがスプリームが避ける方が一瞬早く、咆哮はそのまま大地へと直撃し、周囲を爆風が包み込んだ。

。

シュウウ……

「ッ…… 風が……」

爆風の波はそのままストレンジャーの居る方にも到達し、彼はその場に踏み留まった。身につけていた衣服が風になびく中、手を顔前にやったままその光景を彼は眼にしていた。宙から地面に降り立ったフェンリルは、そのまま連続で咆哮をスプリームに向かって放っていた。だが連続なだけあってか、スプリームも冷静に顔の向きでその咆哮の軌道を読み、跳びつつ壁を蹴って避ける方向を変えたりと、華麗にその攻撃を避けていた。

メイス一つで遠距離手段を持たない彼にとって、この攻撃は中々攻められない状態だった。だがそれでも、彼は諦めずに時期と戦法を考えていた。

『咆哮の吸う合間が、段々伸びているな……』

再び飛んできた攻撃を避けつつ、スプリームは咆哮が放たれるまでの時間が微量だが延びている事を悟った。威力が高く溜めてから放つ攻撃には、必ず弱点があった。一時的だが放つまでの合間、必ず何処かに蓄えておく場所がその攻撃自体には存在している。

すなわち、何処かにその威力分の負担がかかっているという事だ。今回の場合は何処かと言うと、それは空気を吸い込んだ後にその物質が行く先。そう、呼吸器となる臓器だ。

「……スウー……」

いくら体が大きく生身の獣だったとしても、あんなに威力の高い咆哮を放ち続けていれば確実に負担を強いられている。ましてや負担のかかっている場所が臓器であれば、いずれ限界に達し壊れてしまう恐れがある。そう考えると、段々と時間が延びているこの状態、すでに負担が出ているという事だった。

『回数的にまだ放てるとしたら…… 攻める場所は、ソコだ……！』

「グルウァアアアア！！」

再び放たれそうになった咆哮を見て、スプリームは避けつつ攻撃に移ろうとした。だがしかし、そこで計算外の事が起こった。

「……えっ！！」

咆哮事態の発射角度はスプリームの方へとは向かわず、なんとストレンジャーの方へとなっていた。先ほどから立ち居地を変えていなかった彼を横目で見ていたフェンリルは、呼吸器が限界になる前に攻撃に移ったのだ。狙い事態はストレンジャーを消す事では無いと思っていたスプリームにとって、コレは計算外の行動だった。

『しまったっ！！』

慌てたスプリームは、移動していた方向から急遽進路を変え、ストレンジャーの方へと向かって行った。戦う体制ではなかった今のストレンジャーは、立ち尽くす的と化していた。

バツ！

「！」

そして彼を失うわけには行かなかった彼は、全力で彼の前へと立ちふさがり、攻撃を防ぐしかなかった。持っていたメイスを両手で持ち、ガードを取る体制を彼は取った。もちろんそのままでは彼自身の身体も持たないため、軽くメイスから魔力を放ち、防御壁を展開させた。

ギキャキャキャッ！！

「クッ！！！」

「スプリーム！！」

咆哮と防御壁が擦れ合い、金属音に近い音が周囲に響いた。受け止められる自信は無くとも、彼を守るべくスプリームは必死にその攻撃から彼を守った。背後では金属音に掻き消されながらも、彼の名を必死に呼ぶストレンジャーが居た。

『トドメダ……！！』

ゴォォォオオオッ！！

「クッ……！」

咆哮事態を耐え切ったものの、次に連鎖的に起こった爆風も、彼自身が身体を使っても受け止めた。すでに防御壁を放つほどの魔力は放てず、彼自身が彼の壁となった。

その際に、フェンリルはスプリームの元へとかけより、ゼロ距離からの一撃を放つ体制となっていた。

『しまったッ！！』

「終わりダ！！」

フェンリルがそう叫ぶのと同時に、前足の爪が鈍く光った。

ザシュンッ！！

「グハァッ！」

その一撃は腹部から胸部へと向かって引き裂かれ、彼の身につけていた鎧を簡単に引き裂いてしまった。引き裂かれた反動で彼の体が宙へと浮き、血を流しながら少し離れた所に落下した。

ドサッ！

「スプリーム！！」

飛び散る鮮血がストレンジャーの顔や手に触れる中、彼はその場からスプリームの名を叫んだ。だが地面に倒れこんでしまった彼は、動かずその声に反応も示さなかった。

「……！！！」

「フッ……… 中々てこずらせたナ、ウェアウルフ。」

ようやく仕留めたと言わんばかりに、フェンリルはそう言いつつ静かに向きを変え、落ちて行ったスプリームの方へと向かって行った。

「ウウツ……… クツ………」

地面に叩きつけられたスプリームは唸りつつ身体を起こそうとして腕を出し、息を乱しながらも必死に起き上がろうとしていた。だが身体に付けられた傷からは血が流れており、身体には痛みが走っていた。

「……まだ起きる力。」

ガッ！

「グハァッ！」

そんなスプリームを見て、フェンリルは前足を彼の背中に乗せ、勢い良く体重をかけた。その力に耐え切れず、スプリームは再び地面にうつぶせになってしまった。軽く爪が鎧に食い込んでおり、背中から痛みが湧き出していた。

「フッフッフッ……… 惨めな姿ダナ、ウェアウルフ。」

「ッ………」

「貴様がこうなれば、奴が我の考える姿になるのニ、拍車をかけるとも知らずにやるとハナ………」

屈しようとはしない彼の眼差しを向けられつつも、フェンリルは表情を変えずにスプリームに言った。たとえ何もしなくとも、こうなってしまうれば彼の思う壺だという事を分からせるかのように言っていた。

その証拠と言わんばかりに、静かにフェンリルはとある方へと顔を向けた。視線の先には、ストレンジャーが立っていた。

「ストレンジャー……… ……っ！？」

痛みにも耐えながらも、フェンリルの向くその方向を見たスプリームは、その光景に驚いた。先ほどのまでの綺麗な彼の衣服や容姿は無く、そこには自らの体から出てしまった血で汚れた姿があった。自然とそれに気付いたストレンジャーが、手で顔に付いた血を拭っていた。

「血が………」

ドクンッ！

「ッ！！？」

手に付いた彼の血を見て、急にストレンジャーは体内の血が熱くなるのを感じた。気付いた時には衣服にも赤い染みが出来ており、誰かが傷ついた事を表していた。それを感じた途端、彼の静かだった鼓動が一気に高鳴りだしたのだ。

急な事だったからか、ストレンジャーはそのまま立ち眩みに襲われ、軽く痛みを感じ出した左胸を抑えていた。

「……ハア……ハア……… 体が……熱い………」

急に体の中で巡る自分の血が暴れ始め、ストレンジャーは左手と両膝を地面につけ、右手を動悸が激しくなっていく左胸に当てた。先ほどまで弱かった鼓動が一気に増し始め、どんどん鼓動が早くなる。

「フッ。ようやく来たか…… さあ、内なる力を解放しろ。ストレンジャー・ザ・ドラゴン。」そんなストレンジャーの様子を見て、待ちかねていたかのようにフェンリルは呟いた。さらに待望の状態を促すべく、フェンリルは軽く足元に倒れているスプリームの身体を前足で踏んだ。

「クッ…… 体が………血が………！」

その光景を目の当たりにしたストレンジャーは、さらに血が暴れだしたのか、苦しむように言った。もはや自分の内なる力目覚めようとしている様子で、もう自力で抑える事が出来ない状態のようだった。

『駄目だ……… 俺が意識をなくして行動したら……マスターが………』

体温が上がる中考えていたストレンジャーは、ふとラプソディの居る方向を見た。そこには水晶の中で動けない状態、解放の時を待つラプソディが漂っていた。視界はそのままフェンリルの入る方向をへと向けられ、ダメージにより気を失っているスプリームが倒れていた。

先ほどまで手に持たれていたメイスは床に転がっており、室内の明かりで鈍く光っていた。

『スプリーム……… マスター……… ……！！』

目に映った二人の姿を見た途端、ストレンジャーはその場にうずくまり、一気に目を見開いた。

「う………うわあああああ！！！！」

そして、何かに呼び覚まされたかのように叫び、光が彼を包み込んだ。

すると、先ほどまで身に纏っていた衣服が次々と変化しだし、ストレンジャーの胸部分には鎧が装着されていた。四枚布の状態だった下半身部分の布地は3箇所がくっ付きだし、スカートに近い状態へと姿を変えた。ストレンジャーの腕部分には小手が装着され、両手と両足から生えている羽の密集が急成長し、長さが増した。

首元には赤いマフラーが装備されており、その下からは羽ばたく翼の邪魔にならないよう工夫が施された、赤いマントが出ていた。

「……コレが、お前の真の姿だ。ストレンジャー」

眺めるようにその姿を見ていたフェンリルは、服の変化を終え、完全に覚醒した状態のストレンジャーに言った。だが今の彼には黒目部分は無く、完全に無意識に等しい状態となっており、返事が無かった。いつの間にか右手には剣が持たれており、ゆっくりと左手を前に伸ばすと、スプリームの近くに落ちていたメイスが自ら動き出し、彼の左手の中へと収まった。

「……俺は貴方を守る、そして敵対する障害は排除する……… 全ては自らが判断した、障害に対して………」

呟くようにストレンジャーはそう言うと、剣をフェンリルに向けた。

「あのヒトの邪魔は…… 俺が自ら、消してやろう……！！」

ストレンジャーはそう言うと、その場からダッシュしだし、フェンリルに向かって切りかかった。

シャッ！！

「フッ。待っていたぞ！ 真の青龍！！」

ストレンジャーからの攻撃を軽く避け後方へと移動したフェンリルは、満足そうに呟いた。彼の待ちかねていた相手。それはどんな感情にも支配されない、純粹無垢の騎士。自意識ではなく、騎士本来の意識のストレンジャーそのものだった。

今の彼には相手を傷つけないという思いはすでに無く、障害全てを排除する騎士と化していた。だがそれはラプソディが望んだ姿ではない、彼でもあった。

待ち望んでいた相手と対峙出来る事に喜んでいるのか、フェンリルの顔からは笑みが耐えなかった。

「サア、かかってコイ！ 我を楽しませろ！！」

数十メートルの間合いを取りつつ、フェンリルはストレンジャーに挑発した。言われなくともするといわんばかりに、彼は何も言わずに眼を光らせ、再び大地を蹴った。

「……ハァァァァ！！」

相手に向かって走りながら、ストレンジャーは両手に持っていた武器を駆使して双方から攻撃を仕掛けた。剣で切った後はメイスで殴り、殴った後は切るの繰り返しを隙を限りなくゼロにした状態で放っていた。軽く乱舞しながら戦っている感じにもなっており、服装上帯となっている足元付近のスカートが、軽く舞っていた。

もちろんその攻撃全てを無力化するべく、フェンリルは軽く後退しながらも攻撃を受け止めていた。

ガキンッ！

攻撃の一部を早めて、手にしていたスプリームのメイスを振り下ろし、ストレンジャーはフェンリルに攻撃した。だが簡単な一撃では普通に受け止められてしまい、再び周囲には鈍い金属音が鳴り響いた。

「どうした、そんなものか。」

「どうかな……！」

少々期待はずれと言わんばかりにそう言うと、彼はその状態のままそういい、次の攻撃に移った。メイスで相手の爪が動かない状態を利用して、ストレンジャーは右手の剣で相手を切りかかった。その攻撃を眼にし、フェンリルはメイスを振り払い一時宙へと跳び攻撃を避けた。

左手の攻撃が聞かないなら、右手の攻撃で攻めるまで。相手は四足で爪で攻撃を受け止めているため、受身はそれ以上は不可能。攻撃の波は止まらず、剣の攻撃の反動で彼はその場で1回転し

、翼を広げ彼の後追った。

「逃がさない……！」

早々に攻撃を止めるつもりは無い事をあらわにしながら、ストレンジャーは相手に近づきつつ双方の武器で攻撃した。

ガキンッ！

「……面白イ！」

再びやってきた攻撃を、今度は両足の爪でフェンリルは受け止めた。そしてその攻撃を無効化しつつ、相手をさらに宙へと蹴り上げた。足の力には勝てず、ストレンジャーは空へと飛ばされた。

だが相手はそのまま地面へ降りる事を見て、彼は飛ばされつつ近くの柱に両足を付け、相手の近くの地面へと向かって飛んでいった。地面に着地する寸前に右手に持っていた剣を大地に向かって突き刺し、彼は宙で体制を立て直し剣の近くへと降りた。

そして、

「スゥ…… 破ッ！！」

開いていた右手で気合を込めるかのようなしぐさをすると、その気合を飛ばすかのように右手をフェンリルの着地ポイントに向けた。すると、床に刺さっていた剣が光だし、手の向けた方向に向かって地面から水晶が次々と生え出した。

彼の必殺技である『クリスタルウェーブ』が発動したのだ。だが本来この技は、彼が剣に触れていないと発動しないものだ。それさえも無視して、今の彼はその技を放つほどの力が備わっていた。

戦いのために生まれ、目的のためならどんな障害や手順さえも胆略化し、無効化する。今の彼にとって、手順や方法などは言葉でしかないのだ。そんな事は気にしない様子のフェンリルが地面に着地する頃には、彼の技の波は数メートル近くにまで接近していた。

「甘イ！！」

だがそれさえも計算内の様子で、フェンリルは水晶の波が来るタイミングを見て、右手を振り上げ突き出してくる前の水晶を爪で粉碎した。水晶の波は彼が砕いた所はその場で止まってしまい、他の場所だけは壁にぶつかるまで水晶が出続けていた。

半分彼は水晶に囲まれてしまう形になってしまっていたが、先ほどの豪腕と爪のみで周辺的水晶も粉碎した。砕かれた水晶は小さな欠片となって、まるで星屑になっていくかのように宙を舞った。周囲の光で欠片が乱反射し、軽く周囲を煌びやかに彩った。

「なら…… これならどうだ！」

♪～～

その様子を見ていたストレンジャーは、左手に持っていたメイスを大きく振りかぶり、彼の居る

方向へと向かって投げた。攻撃の反動でメイスが軽く音を鳴り響かせながら、メイスは回転しながら水晶の波を粉碎しつつ敵に向かって飛んでいった。

スプリームにしか鳴らせない特殊なメイスも、今の所有者であるストレンジャーの手によって音を奏でている。それは手順とはまた違った話で、彼がスプリームの対なる存在である事を示していた。心と体を互い支えあう存在として創られた彼等は、対なるがゆえに中身が一緒なのだ。だからこそ彼に出来る事が、今の彼にも出来るようになってしまっていた。

戦闘向けではない本来のストレンジャーに、出来てしまっていたのだ。これも、ラブソディが望んでいない理由の一つだ。

対なる存在であるからこそ、歩いていく道も同じにはしたくなかった。戦いを運命付けられたスプリームの分まで、平和に過ごして欲しかった。身体は彼と同じだからこそ、心優しい存在として無駄には振るわないようにしたかった。その願いが、彼が覚醒したと同時に欠落し、本来の願う前の姿となってしまったのだ。

スプリームもその事は知っており、それを望んでいない主の事も知っていた。だが彼も願いを守りきれず、今はストレンジャーの攻撃で放たれた水晶の間に倒れていた。軽く花畑に倒れてしまっている騎士にも見え、何処か幻想的だった。

そんなストレンジャーの投げたメイスは、回転しながらフェンリルの方へと飛んでいった。回転しているため、受身だけでは防ぎ切れないだろう。だがそれも気にせず、フェンリルはそんなメイスの攻撃を避けるため宙へと跳んだ。

「………… スウ…………」

もちろん逃がすつもりのないストレンジャーは、その行動を待っていたと言わんばかりに、周囲の息を吸い込んだ。ブレスの、兆候だ。

「焼け朽ちろ…………！ 『ファイヤーブレス』！！」

ポオオウッ！

丁度跳んだ頂点となる場所に向かって、ストレンジャーは火球ブレスを放った。

「何ッ！」

さすがに遠距離手段となるメイスを使った後に来るとは思っていなかった様子で、フェンリルは両手足でその攻撃を受け止めた。だが炎という事は熱の後の爆風が発生し、彼は宙から再び地面へと叩き落された。

ズーン…………！

「……クッ………… さすがダ…………」

叩き落され背中から地面に落とされたものの、フェンリルはさほどダメージを受けていない様子でゆっくりと起き上がった。だが炎の焼け跡と激突の傷もある上、最初の連続攻撃によるダメー

ジもあったため、少し辛そうな表情が見えた。

「……………」

たとえ相手が辛そうでも、今のストレンジャーは攻める事を止めなかった。突き刺さった剣を右手で引き抜き、相手の距離と感覚を見定めていた。

そして両者の視線が重なった、その時。

バツ！！

ほぼ同時に両者が大地を蹴り、最後の勝負に出た。メイスは飛ばしたため、右手に剣を持って仕留めようとするストレンジャー変わって傷跡が痛むものの、それでも対決したかった相手を自慢の爪で殺そうとするフェンリル。目的が何にしる、二人はどちらかが倒れるまで戦いを止めようとはしなかった。

どんどん両者の距離が縮まり、攻撃の準備に入った。そして、

ジャキンッ！！

「……………」

両者の攻撃がほぼ同時に入り、すれ違った場から数歩の距離で両者は止まった。剣を視線の先に向けたまま立っているストレンジャーと、右手を振るった状態で停止しているフェンリル。だが一瞬の事だったため、まだ両者には何も異変はなかった。

ピシッ

「……ッ」

しかし攻撃は入っていた様子で、ストレンジャーの身に着けていた衣装が一部開き、顔には傷跡が一筋入っていた。傷跡が開いたと同時に、血が少々流れだし表面に出てきた。

『フッ…… ……！！』

バシュッ！

攻撃が入った事を確認したフェンリルは、軽く笑みを浮かべ勝利を確信した。だがそう思ったのも束の間、彼の身体に痛みが走り血が噴き出したのだ。それと同時に、フェンリルは力尽きその場に崩れてしまった。

ズーンッ……………

「……………」

仕留めるべき対象が止まった事を確認すると、ストレンジャーは裂かれた傷のある皮膚を軽く手の甲で拭い血を拭き取った。裂かれた部分が小さかったため、血はそれ以上流れずそのまま手を振ると地面に数的垂れ落ちた。その後敵が居なくなったことを確認し、彼は助けるべき相手の元へと向かって静かに歩き出した。

「……………マスター」

戦いが激しかったにも関わらず、何の被害も受けていなかった彼と閉じ込めていた水晶。その場へと到着すると、彼は軽くつぶやきつつ中に居るラブソディを見ていた。

水晶の中には別の空間が広がっている様子で、彼は浮遊に近い形で漂い中で手を組んでいた。スプリームのみでも破壊出来ず、彼自信にしか扱えない剣のみで開放できる特殊な水晶。しばらくその様子を見た後、彼は持っていた剣を振り上げ、静かに剣先で一点を突いた。

ピキピキッ……！

突いたと同時に、水晶は突かれた地点から徐々に割れ目が生じだし、奥の方へと広がりだした。万遍なくその割れ目が行き届くと、水晶は上部から壊れだし床には転がらず徐々に消えて行った。空間の変化に伴いラブソディの体制が前のめりになるのを見て、ストレンジャーは静かに両手を差出し彼の事を受け止めた。

「……う、ううん。」

水晶の中から救出し、閉じ込めていた水晶が完全に消え去った頃。ラプソディは静かに目を覚まし、彼を抱えていたストレンジャーの顔が彼の視界に映った。

いつもとは違った雰囲気があるものの、紛れもなくそこにあるのはストレンジャー自身の顔だった。だが両目には光がなく、彼はただ静かにラプソディの事を見ていたのだった。

「……………」

「ストレンジャー……君。」

それと同時に、何が起こっていたのかを軽く察し、ラプソディはゆっくりと彼の腕から起き上がり地面に足を付けた。普段の服装とは違った井出達で居るラプソディは、その場ではドレス姿だった。黄緑と黄色で構成されたドレスは、とても豪華で足元付近には一部金糸の刺繍が施されていた。

背後には襟下から伸びる赤いマントがあり、今のストレンジャーに似たマントだった。両者のマントの裾には、その地を纏め彼の管理する事を示す国家のマークが刻まれていた。スプリームの小手と同デザインの刻印だった。

立ち上がったラプソディは周囲を見た後、自分の事を静かに見守っているストレンジャーの方へと振り向いた。彼の知っているストレンジャーなのだが、だがやはりどこか違う雰囲気を出している今の彼。その姿をしばらく見た後、静かにラプソディはストレンジャーの顔に手を触れ、優しく口付けをした。

すると、二人の足元からは風が吹きだし、両者は目を閉じた。それと同時に、ストレンジャーの目に纏っていた衣服が元に戻り始め、初めの青色の軽装へと姿を戻した。

再びストレンジャーが閉じた目を開けると、そこには黒目の戻った本来の彼が立っていた。

「……ストレンジャー……………君。」

「よかった…………… 助か……………って……………」

両者が目を開けると、少し距離を空けラプソディは彼の名前を呼んだ。するとそれに反応し、ストレンジャーがそう返事を返した。だが、

フラッ……

「あっ！」

急に彼の身体がバランスを崩し、そのまま彼は後方へと向かって傾いた。その様子を見たラプソディは、慌てて彼の事を受け止めようと心みた。すると、

ガシッ！

「……………」

彼の体は妙な位置で停止し、同時に何かに抱きかかえられたような音がした。ラプソディが彼を受け止めた相手を見ようと、顔を上へ少し向けた。

するとそこには、先ほどまで倒れていたスプリームがストレンジャーを抱えた状態で軽く膝をついていた。だが先ほどの戦いのダメージもあってか、額の一部からは軽く血を流した後があり、身体の至る所に傷跡があった。だが大分傷跡が塞がっている様子で、もう血は流れていなかった。

「……すまなかったな、ストレンジャー。こんな事をさせるために、呼んだはずじゃなかったのにさ。」

「スプリームさん……」

軽くストレンジャーを抱きかかえていたスプリームは、口を開き今は意識を失っているストレンジャーに語りかけるように呟いた。すでに彼は元の姿に戻っており、先ほどまでの戦うために居た彼とは違った表情を見せていた。

気を失っている様子で、今は落ち着いた顔色を二人に見せていた。

「すまない主。俺の……責任だ。俺だけじゃ、奴は止められなかった……」

「……」

「主が望まない、ストレンジャーを呼んでしまった……。……貴方が望んでいなかった、彼を。」

「仕方なかったんです、よ。……ゴメンなさい、ストレンジャー君……」

ストレンジャーに言いかけていたスプリームは、不意に顔をあげ彼の名前を呼んだラプソディを見た。それと同時に、彼は今まであった事と彼を呼んでしまった事を詫びていた。

元々この世界に来て良い外部の存在は居るはずがなく、ストレンジャーは招かざる存在だった。だがスプリーム自身の力ではラプソディを閉じ込めていた水晶を破壊出来ず、やむなくストレンジャーを呼んだのだ。しかし恐れていた事態にまで発展してしまい、両者が望んでいなかったストレンジャー自身の意識を呼び覚ましてしまった。

二人はその事を互いに悔み、聞こえていないであろうストレンジャーに言った。

その後ラプソディはその場から移動し、別の位置で倒れていたフェンリルの元へと向かった。身体から流れていた血はまだ傷跡から流れており、このままでは死んでしまうような状況だった。

「フェンリルさん……」

「……お前…カ…… 惨めなものだな……我が負けるなどトハ……」

「それだけ、あの状態の彼は行動を止めない輝きを持っているんです。無理ありません。」
倒れているフェンリルの近くで膝をつき、ラプソディはそっと彼に声をかけた。すると閉じていた眼がゆっくりと開き、フェンリルは勝負に負けた事を彼に伝えた。だが負ける理由もラプソディにはわかっていたため、それ以上は何も言わなかった。

「拾われた身デ……起こした行イハ、我への罪ダ…… ヘルとヨンムンガルドにも、苦痛を与エル……事モ無イ……」

「良いんですか。貴方自身が望んだ事を、成し遂げたというのに。」

「モウ……十分ダ……… 怒りナド………とうの昔に消え果テタ……… ……あの変わり者の神の痛ミモ、再現する事はナイ………」

「……」

倒れた状態で言うフェンリルに対し、ラプソディは望んだ事をしたのに罪を感じているフェンリルに問いかけた。だがこの地に居る時点で彼の恨みや怒りは無く、彼が一時期世話になった『テュール』の事も案じていた。それだけ、彼の過去が悲惨かつ。つらい記憶だったのだ。ラグナロクは等の昔に終戦を迎え、もう一度引き起こす理由など彼らには無かった。だが彼の意識はラプソディに拾われ、その身に帯びた汚れた記憶を洗い流す施しをされ数年間生きてきた。しかしずっとこの地に居るべきではないと悟ったフェンリルは、この地から出るのと同時に彼に一つだけ願いを託したのだ。

『戦争の引き金になった時も、ずっと一緒にいたテュールに。もう一度だけ会いたい。』

純粋なその気持ちは、悪魔では普通考えにくい事だった。だがその記憶は少なく、彼に会える切っ掛けなどはこの戦争の時だけ。そのために、彼は犠牲をたくさん出しつつもラプソディの体に乗っ取りその行いを果たした。

もちろん彼のやろうとしていた事を当に理解していたラプソディは、彼に何も問おうとはしなかった。もう彼を苦しめる理由は、すでに存在していない。過去に汚れた記憶だけでも、洗い流せばだけで十分。彼の弟と妹にも再開でき、会いたい相手にも会えた。家族と再会できたその時を、見送りたい。彼はそう考えていたのだ。

「せめて、貴方を送るべき場所に…… 送らせてください。」

「………」

このまま消えゆこうとしていたフェンリルを見て、ラプソディは一つの提案をした。妙な事を言い出したと思いつつ、閉じかけていた瞳を開けつつフェンリルは彼を見た。

「また一人になる事があるのでしたら、貴方を家族の元へ。そして、テュールさんの顔をもう一度だけ見させてあげたいんです。」

「……これ以上、我に付きまとウナ……… もう十分、施しは受けタ………これ以上はいらヌ。」

また寂しい思いを消えた後も覚えるのだったら、せめて彼の元に居るべき存在を。家族と、彼が唯一認められた神の元へ。彼は送りたいと言った。だがフェンリルからしたら、すでに長期にわたって彼の施しと優しさをたくさん受けていたため、これ以上の干渉はいらないと言った。

すでに十分なまでに優しさを感じ、殺された時の恨みまで消してもらった相手だ。神に等しい力を持つ者に、これ以上は世話になりたくないと言った。彼は意思を示していた。

「お願いします……フェンリルさん………」

ギョッ

「……？」

「貴方のその優しさがあるのに、貴方の優しさは誰にも受け入れてもらえない……。貴方も一人の存在なのに、平等に受けられない思いなんて。駄目なんです……」

「……」

だが彼の意志に反して、ラプソディは軽くフェンリルの顎もとに手を回し抱きしめながらそう呟いた。悪魔である事が理由で、優しさを平等に得られない存在などはいてはいけない。むしろ優しくなった今だからこそ、もう一度さみしい場所には送りたくない。居るべき相手がいるのだったら、せめてその存在達と共に居て欲しい。

ラプソディは軽く涙を流しながら言うと、フェンリルは静かに顔を動かし彼の事を見た。男と言うには似つかわしくない姿をしているラプソディは、フェンリルから見たらただのお節介焼きの存在だった。だがそれでも彼は自分の事を思い、ずっと今まで静かに見守り時を共にしてきた。

『フェンリルの意志を継ぎたい』と言った事もあり、それだけラプソディはフェンリルの事を大切にしていた。

改めて今その事を思い出し、フェンリルはそれ以上何も言わなかった。お節介焼きに何を言おうと無駄であり、せめて最後に請けられるものがあるならと。否定しない気持ちを、彼は顔をラプソディの頬に着けながら示した。

「……スプリームさん。後は、お願いします。」

フェンリルから意志を聞き、ラプソディは彼の傷をある程度癒したのちにスプリームにそう言った。ストレンジャーはフェンリルの背中で横になっており、外へと向かう道中は彼が運ぶ事を表していた。そして先導を切る前に、彼はスプリームに一言告げたのだ。

「ああ。……もういいのか、フェンリル。」

「無用な折衝はいらヌ。お節介焼きは、一人で十分ダ。」

「分かった。」

スプリームは返事をしつつ、彼の隣に居たフェンリルに別れの挨拶をした。だがこれ以上はもう何も必要としない事を示し、お節介はいらないと言った。軽くその言葉を聞き、苦笑しつつスプリームは返事を返した。

もう完璧な一人の存在としてフェンリルは確立しており、寂しくはない事を悟ったのだろう。同時に照れ隠しをしている事も悟ったからか、笑いが抑えられない様子だった。

「……主、俺は良いんだぜ。このままでも。」

もう一度ラプソディに話しかけつつ、スプリームはとある件について彼に意見を言った。この後事後処理として行う事をまだ確立させたくない様子で、意見をもう一度確認したようだ。

「いいえ。私は、その方があの子達のためだと思うんです。もう無駄な行為を、続ける必要はありませんから……」

「…… 分かった。」

しかし意見を変えるつもりはないらしく、ラプソディは問いかけに対しそう答えた。彼の主であ

るラプソディから意見を聞き、スプリームはもうそれ以上は何も言わず、横へとずれ彼らを見送った。

彼らが向かった通路の先にあるもの、それはその世界から出る門がある場所だ。夢から覚めるためにあるようで、現実世界と心の世界を繋ぐためのものだ。こちら側からはその移動手段しかなく、フェンリルを見送るのにも最適な手段だったよう。

静かに門を開け、三人はそのまま光の中へと消えて行った。

『……何かが、おかしい。』

一方そんな事が裏で行われているとは知らずにいる、コレージ達のいる戦場。倒れ冷たくなってしまったストレンジャーを抱えていたコレージは、周りの空気が妙な事を悟った。何故か号令が放たれた後の動きが胆略化しており、むしろその後の場の空気が変わりつつあったのだ。

戦う意識がすでに欠落しているかのように、周囲に居た敵達は別の位置で停止しており、まるで時間が止まったかのような雰囲気があった。敵対していたチェリーとテュードも武器を持っているのにも関わらず、それ以上の行動は取ろうとしていなかった。

【何かが終わった。】

そう思わせるかのように、止まっていた。

「……クッ……グッ。」

「？」

辺りの空気が変わりつつある事を見ていたコレージは、不意に黙っていたラプソディから声が発せられたのを耳にした。視線を再び彼の元へと戻すと、先ほどまでの戦うかのような宣戦布告をしていた時とは違い、何かが中から出そうな雰囲気があった。

身体が徐々に前のめりになっており、両手は脱力しているのかだらんと垂らしていた。

『何だ……何が起こってるんだ。……？』

やはり様子に変な事を悟り、コレージは困惑しつつ周りの状況を収集した。すると、先ほどまで曇っていた空が段々と裂けだし、隠していた太陽の光を帯状に戦場へと降り注ぎだした。大地は少しずつ明るさを増し始め、砂地に近かった大地からは次々と自然が湧き出したのだ。生えたかのように草花の芽が顔を出し、それを待っていたかのように周囲も草花が噴き出したのだ。もはや戦場ではなくなったかのように、一つの楽園になりだした。

「花が……」

「グッ……ハァアアッ！」

パシュンッ！！

「ッ！！」

大地の変わりように驚いていると、ラプソディが再び声を発した。次の瞬間、前のめりだった体制を壊すかのように体が後ろに反れ、彼の足もとから淡い虹色の光が噴き出した。光は周囲に飛び交い、辺りを一気に白くした。

急な事だったため、コレージは目を閉じ増える光から目をそらすしか出来なかった。

シューーン……

「……… なんだ、今度は……」

急に次々と起こり出す変化について行けず、コレージはただ茫然と変化にそって行動するしかなかった。これ以上急な対応をしようも、先ほどまでの戦いのダメージ等もあり急に反応するほど体力は残っていなかった。

せめて安全な変化である事を期待しつつ、変化を見送っていた。すると。

「う、うーん……」

「！！」

コレージの腕で何かが動くと同時に、声が聞こえてきた。顔を下に向けると、そこでは先ほどまで屍と化していたストレンジャーが目を覚まし体を動かしていたのだ。手にはいつの間にか相手の体温を感じ取れるほどの温かさが伝わってきており、光と共に復活した様子だった。

「ストレンジャー……」

「……コレージ。」

死んでしまったと思ったストレンジャーが息を吹き返し、コレージは涙を流しながら名前を呼んだ。するとストレンジャーも小声ながらも返事を返し、彼の肩に手をかけ起き上がろうとした。だがまだ完全に復活していないのか、少々体が重いらしく一生懸命に手足を動かしていた。その様子を見て、コレージはストレンジャーが起き上がるよう支え、ゆっくりとその場に立たせた。紛れもなくそこに居るのは先ほどまで倒れていた友人であり、もっとも生きていて欲しいと願う相手だった。そのためか、涙が未だに流れ続けていた。

「良かった…… 生きていて……」

「いろいろ、あったけどな…… マスターは。」

「ココです。」

「……あつ。」

軽く涙を拭うコレージに返答を返しつつ、ストレンジャーはラブソディの事を気にかけた。するとストレンジャーの後方で声が聞こえ、彼らは声のした方を見た。

そこには彼らのよく知るラブソディと、先ほど一緒にここまでやってきたフェンリルがちょこんと彼の隣に座っていた。綺麗な体毛が日の光に照らされ、軽く光っているような感じがした。もうすでに戦う気はない様子で、ただ静かにその場に座っていた。

「アイツは……」

「フェンリル。でも、もう平気だぜ。戦争は終わったんだ。」

「……そうか。」

ラブソディの無事と同時に、座っている狼が誰なのかをコレージは問いかけた。するとストレンジャーが代わりに返答し、敵対していた相手でありもう戦う意味合いがなくなった存在だと説明した。説明を聞き、コレージはそう言い静かに二人を見ていた。

「……モウ、終わったのか。」

「はい。争う意味は、もうなくなったんですよ。」

一変した周囲の環境を見て、フェンリルは呟きながらそう言った。独り言に近かったが、ラブ

ソディはそう答え全て終わった事を彼に説明した。

「そうカ…… ……ヘル、ヨンムンガルド。」

シュンツ

「はい、お兄様。」

「兄貴、来たぜ。」

ラプソディからの言葉を受け、フェンリルは軽く呟くように左右に向かってそう言った。すると、声に応じた存在が彼の前に召喚され、姿を取り戻したようにその場に居た。

一人はチェリーに似た少女の姿をしており、一人は同じくテュードに似た蛇の姿をしていた。ヘルと呼ばれた少女は、下半身が人のような生身の姿をしておらず、少々腐食したような足を持っていた。だが上半身は生身の人と同じで、可愛らしい表情をフェンリルに見せていた。

変わってヨンムンガルドは少々奇抜な体色をしており、赤と黄色と言う毒蛇に近い色をしていた。身体はフェンリルよりも大きく、弟ではあるが普通に背丈はありそうだ。この三人は魔人の間に生まれた、兄弟だ。

どれも人とはかけ離れた姿をしていたが、一人の存在には変わりはない。ラプソディは横でその光景を見ており、フェンリルは再開した弟と妹を見て軽く上体を前に向け、頬を彼等にこすり付け再開を喜んでいて。二人も互いが出来る喜びを表現し、分かち合っていた。

「……フェンリル。」

「？」

そんな三人の元に、一人の青年の声が聞こえてきた。名前を呼ばれフェンリルは振り向くと、そこにはもう一度会いたいと願ったテュールが立っていた。あの時持っていった右腕は今もなく、顔は軽くゆがんでおりあの時同様に涙目になっていた。

「……貴様カ。何故騙シタ。」

再開を喜ぶかと思いきや、フェンリルは怒っている様子でテュールにそう言った。

「すまない…… 君からしたら、私が何をしようと許してはくれないだろう。それだけ、君の心を傷つけた……」

「……」

「少なすぎた代償を、またココで埋め合わせたい。腕とは言わない、私の身を引き千切ってくれ。」

予想できていた返答を聞き、テュールは再び詫びを言いながらその場に座り込んだ。彼の顎を開けさえすれば、軽くテュールを丸呑みする事は可能だった。だからこそ無防備な状態を彼はとり、持っていた剣は遠くの地に刺さっている状態となっていた。

何をしても許して貰えないのなら、命を捧げる気で居たのだろう。再開を喜んだのも束の間、周りの空気は冷え切っていた。

「……」

「お兄様。」

「構うナ。俺の獲物ダ。」

軽く前進する様子を見て、ヘルは声をかけた。しかし邪魔立てはいらないと言い、二人で決着をつけるとフェンリルは言った。一定の距離を進んだ後、丁度口を開き彼を食べられる位置へと移動すると、彼はその場に座り込んだ。

そして、テュールを見ていた。

「さあ、味は悪くとも償わせて下さい。私のした過ち」

「ぬるイ。下らない事をスルナ。」

「え？」

いつ食べられても良いように、テュールは顔を下に向けたままそう言った。だがフェンリルは行動がぬるいと言い出し、余計な事をするなと言った。どういう意味が分からず、テュールは顔をあげ彼を見た。

「もうそんな事をせずトモ、お前がしたかった事はとうにわかってイル。償いの行為がそれだというのなら、力の神と聞いて呆レル。」

「……………」

「我が間違っってイタ。騙した以前ニ、貴様は何もしていなかったのだからナ。」

「フェンリル……………」

まるで上下関係が変わったかのように、フェンリルはテュールにそう言った。誤解以前に強さを見せない彼は彼ではないと言い、あの時彼に向けた言葉をフェンリルは詫びていた。互いに何もしていなかった、何も出来なかつただけなんだと。

そう分かち合った、その後。

スッ

フェンリルは静かに鼻先を彼の鼻につけ、もう怒っていない事を表現した。親しい相手にしかない行動の様子で、テュールは悟ったと同時に彼の顎に手を回し優しく彼の事を抱いた。

「済まなかつタナ、テュール。」

「私もだ…………… フェンリル。」

再開し誤解が解けたと同時に、二人は涙を流した。

それと同時に、周囲に降り注いでいた日差しの帯の量が増えだし、彼らの元に降り注いだ。すると、彼らの身体が徐々に輝きだし、ゆっくりと宙に浮きだした。どうやら、別れの時のようだった。

「フェンリルさん。」

「ラプソディ…………… 世話に、なつたナ。」

軽く体が浮く中、ラプソディが声をかけるとフェンリルは前足を動かし差し出された彼の手を握った。もう互いが合う事は無いと思い、せめてしたいと言っていた別れの瞬間が今来たため。互

いに手を取り合い、その光景を目に焼き付けていた。

後方ではストレンジャーとコレージ、プロミスにラクト、それにブラベリーとイノセントもその様子を見守っていた。今意識がある者達しか見れない光景だったが、それでも皆はその様子を見守っていた。

「分かり合えて、良かったですね。これから、何処へ行くんですか？」

軽く浮くのを引き留めるように、手を取りながらラブソディは言った。別れが惜しい様子で、軽く涙を流しながら言っており、声が震えていた。

「解らナイ。……だが、一緒に居るべき存在が解れば寂しくはナイ…… いつまでも、甘えは見せないサ。」

「そうでしたか。……テュールさんと、仲良くして下さいね。」

「ああ、そうする……… またな、ラブソディ。」

そんな彼を思っか、優しい言葉を向けながらフェンリルはそう言い手を離した。そして四人はそのまま空へと向かって行き、軽く手を振りつつラブソディに笑顔をそれぞれが見せた。面倒事をしてしまった事と、悪魔の自分にやさしさを向けてくれた事。それ以外の罪と、それ以上の想いに対して。手を振った。

そしてそのまま、四人は空へと消えて行ってしまった。

『……またね。フェンリルさん………』

四人が消えたと同時に雲は流れだし、空は青空へと包まれた。そして何処からか吹いてきた風にスカート揺らしながら、ラブソディは行ってしまったフェンリルの事を思い続けていたのだった。

もう二度と、寂しくないように。そう願いながら。

— E P I S O D E E N D —